THE CENTER FOR CULTURAL AND SOCIAL STUDIES OF ASIA
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
2009.8.1 No.1

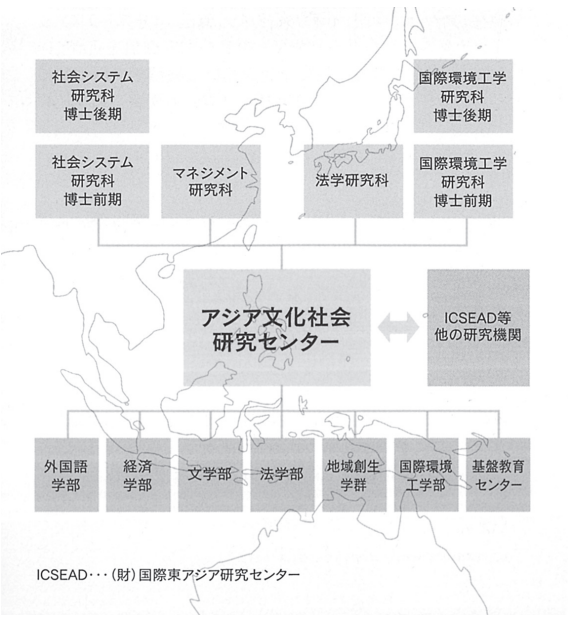
アジア文化社会研究センター
ニューズレター

CONTENTS

■センター紹介. 1
■第１回国際シンポジウム報告. 2
■第２回国際シンポジウム報告. 3
■文化ツーリズム調査研究報告. 5
■今後の活動予定. 6
■アジア関係図書コーナーのお知らせ. 7
■センター専任教員紹介―所属・専攻・主要業績. 7

センター紹介

アジア地域を研究対象とする学内教員のネットワーク構築のスタート
～アジア文化社会研究センターの設置～



北九州市立大学は、アジア研究者を多数有し、アジアをみすえた公立の総合大学です。アジアとの交流を推進してきた歴史をもち、かつ環境問題に取り組んできた北九州地域の特性を活かし、地域に立脚しつつ、未来へ向けた、高度で国際的な学術研究拠点の形成に取り組んでいます。

「アジア文化社会研究センター」は、このような本学の特色を活かして、アジアの発展を担う人材育成と研究拠点の形成を図ることを目指して2008年６月に誕生し、この６月で１年目を迎えました。アジア地域等を研究対象とする学内教員のネットワークを構築し、アジア地域に関する多様な専門分野を持つ教員間の連携を図り、学際的な調査研究を進めています。

センターのニューズレター創刊号をお届けします。センターへのみなさまのご支援をどうかよろしくお願いいたします。

第１回国際シンポジウム「越境するアジアのポップカルチャー」

田村　慶子（北九州市立大学大学院社会システム研究科）

現在、日本のアニメ、TVゲーム、ドラマなどのポップカルチャーはアジア全域の特に若者層を中心に深く浸透、同時に中国や韓国、香港、台湾の映画、TVドラマ、アイドルも日本を含むアジア全域で人気を博している。このような状況を踏まえて、ポップカルチャーはアジア共通の文化を創ることに貢献できるのか、また、中国や韓国の若者は、日本のポップカルチャー受容と「反日・抗日意識」をどのようにバランスを取って行っているのか、などを考えるために、アジア文化社会研究センター主催の第１回シンポジウム「越境するアジアのポップカルチャー」を2008年11月21日に開催した。なお、このシンポジウムは、アジア文化社会研究センター設立記念シンポジウムである。

シンポジウムの登壇者と討論者には以下のような国内外の専門家をお招きし、コーディネーターは田村慶子が務めた。なお、参加者は本学学生97名と市民26名の合計123名で、シンポジウムはすべて日本語で行われた。

報告者　李修京（イ スギョン）
東京学芸大学准教授
呉偉明（ゴー ワイミン）
香港中文大学教授
呉咏梅（ウー・ヨンメイ）
北京外国語大学日本学研究センター助教授
討論者　金貞愛（キム チョンエ）本学准教授
波潟剛（ナミガタ ツヨシ）
九州大学准教授、本学非常勤講師

李修京氏の報告「越境するアジアのポップカルチャー：韓国の視点から」は、日本の植民地時代からの両国文化の接触を歴史的に遡って相互の接触と影響を振り返り、1980年代以降の特色として、人々の文化的嗜好が多様かつ個性的になって、もはや韓国において日本文化は両国関係に影を落とす歴史問題とは別の次元として愛用されるようになっていること、さらに90年代になると、文化コンテンツの共用や文化的協力がアジア各国で自然に行われるようになってきて、アジアは共存社会という認識が高まっていると述べた。最後に、ポップカルチャーは歴史の総括を促し、国家間の文化的架け橋となることが期待できるのであり、国境の越え方を示唆する重要な役割を担うだろうと結んだ。

呉偉明氏は「香港若者における日本の漫画、アニメ、ゲームに対する消費および態度」において、自身が行った13歳から29歳の香港の若者へのアンケート調査を通して、次のようなことを報告した。①日本の漫画、アニメ、ゲームは他国のものと比べて圧倒的に人気があること、②香港若者の消費パターンは本や雑誌、メディアよりもインターネットが主流になりつつあり、漫画やアニメのフィギュア、おもちゃなどの関連商品の消費や、漫画の舞台となった場所の「日本聖地巡礼」が盛んになっていること、③ただ、香港の政府やメディア、教育界は日本の漫画やアニメには批判的でマイナス評価をしているために、若者は社会的プレッシャーと向き合わねばならない。

呉咏梅氏は「中国と日本のポップカルチャー：テレビドラマを中心に」と題した報告のなかで、日本のポップカルチャーは、その独特な魅力と新鮮さで中国の若者を魅了、彼らの成長過程とサブカルチャーの生成に大きな影響を与えつつあること、中国の経済成長に伴って若者のナショナリズムは高揚していくが、日本の生活文化やライフスタイルに好意を持っていることは変わりないと述べた。そして、この好感こそが、日中両国の新しい世代による相互理解の可能性を示唆しているのであり、互いに映画やドラマなどのメディア文化で感じる共感や好感によって相互理解を深めていこうと呼びかけて、報告を結んだ。

この３つの報告に対して、討論者の金貞愛氏と波潟剛氏からは、日本文化が好感を持って受け入れていることと韓国や中国の若者に見られる強い反日感情をどう考えればいいのか、相手国のポップカルチャーに親しんだためにその国に対する固定観念が出来てしまうのではないか、また、日本の漫画やアニメは中国の古典を連想させるから人気があるのではないか、文化の相互交流が進むに連れて合作形式

のものも増えてきているが、それぞれの地域における成功例や失敗例はあるのか、など多岐にわたる質問やコメントがなされた。

会場参加者からも、日本の韓流ブームは日本にもはや無くなってしまったものへの幻想ではないか、顕在化しているナショナリズムの偏狭さを越えるために必要なことは何か、といった熱心な質問が相次いで、予定していた120分は瞬く間に過ぎてしまった。

報告者の３人はすべて日本留学経験や長期滞在経験を有する「知日派」であり、流暢な日本語を話す。とりわけ呉氏は「知日部屋」というブログで日本の様々な問題を取り上げて解説を加えるほど、日本に対する知識と造詣は深い。ただ、３人とも日本のいい面ばかり強調するのではなく、批判すべきところは批判した上で、長期的な展望を持って文化交流を語ることのできる稀有な専門家である。このような方々を第１回シンポジウムにお招き出来たことは、とても光栄であった。ご多忙の中、本学まで来てくださった報告者と討論者には心からお礼を申し上げたい。また、会場設営や受付、質疑応答時のマイク回し、報告者の送迎を田村ゼミの学生が手伝ってくれた。学生たちにも感謝している。

アジア文化社会研究センターの今後の発展のためにも、このような人的なネットワークを大切にして、知的交流を継続、蓄積していきたいと考えている。

第２回国際シンポジウム「日・中・韓におけるケータイ時代の言語文字文化」

板谷　俊生（北九州市立大学外国語学部）

報告者

陳　　岩　　大連外国語学院日本語学院教授

李　鮮瑛　　同徳大学日本語日本文学科講師

佐藤　昭　　北九州市立大学外国語学部教授

討論者

印道　緑　　北九州市立大学国際教育交流センター教授

山崎和夫　　北九州市立大学外国語学部教授

コーディネーター

板谷俊生　　北九州市立大学外国語学部教授

北九州市立大学アジア文化社会研究センター主催第２回国際シンポジウムが2008年12月６日（土）に開催された。テーマは「日・中・韓におけるケータイ時代の言語文字文化」で、中国および韓国の大学から研究者を招聘し、公開シンポジウムという形式で開催した。当日の参加者は約百名であった。

まず、各報告者の発表内容の要旨を簡単に紹介する。

大連外国語学院の陳教授は「携帯電話ショートメールについて」と題して発表を行った。

陳氏は論点をつぎの３点に絞って発表した。

⑴　携帯電話ショートメールの位置づけについて

携帯電話ショートメールは英語ではShort Message Service（SMS）といい、中国語では「短信」という。漢字70字が情報伝達の限度であるが、携帯電話の保有量が世界第一位となった中国では携帯電話ショートメールは人々の生活の隅々にまで浸透しており、第５の媒体（メディア）といわれている。

⑵　携帯電話ショートメールと社会文化について

毎年、春節等の祝祭日には教師である陳氏の携帯電話に感謝と祝福のメールがたくさん寄せられると紹介し、携帯メールは中国人の日常生活にますます重要な位置を占め、人々の生活習慣ひいては社会文化、国民心理等に非常に大きな影響を与えているとして、プラス面とマイナス面を指摘する。いつでもどこでも送受信できる携帯メールは、友人・恋人・同僚達との情感の交流を豊かにし、交際方法に新しい変化が生まれた。しかし、携帯メールは人々の生活に便利さをもたらすと同時に管理することが難しいマイナスの作用も及ぼす。中国でもポルノ、詐欺、流言飛語、無価値な情報提供を取り締まるのは困難である。さらに青少年に与えるマイナスの影響が社会問題化しているという。

⑶　携帯電話ショートメールの言語と修辞

携帯メールはすでに一種の社会文化現象であると同時に一種の言語現象でもあると指摘し、主に次の４項目に分けて携帯メールの言語的特長を紹介した。

ⓐ　携帯メールの情報量は漢字70字が限度であ

るため、文体の特徴は簡潔で洗練されており、音読すれば朗々と心地よく、容易に伝達できる点にある。

(b) 相手の顔や表情が読み取れない欠陥を補うために記号を使う。記号は人に一種の立体的な美感を与える。

(c) 携帯メールのスタイルは機知に富み、粋で、冗談や風刺に満ちたものが多い。

(d) 携帯メールは、情感が繊細で、含蓄があり、面と向かって相手に感情表現しない東洋人の文化的伝統に適している。

次に同徳女子大学李鮮瑛氏の「韓国におけるケータイ時代の言語文字文化」を紹介する。

(1) 韓国のケータイ利用状況について

2006年12月の統計（「朝鮮日報」）では、韓国のケータイ利用者数は4840万人である。年齢別では、小学校６年あるいは中学校１年時に最初のケータイを購入し、交換周期は１年～1.5年。ケータイは若者の洋服や靴のように体の一部分になっている。

(2) 新しい「疎通」の方式

教師のショートメールにも心を開くので、その教師は生徒に合わせてショートメールで疎通しようと努めているという事例を紹介し、この新しい「疎通」方式には憂慮と期待が交差する部分もあるが、それを肯定的な方向に導いていくことが肝要であると指摘する。

(3) 韓国のケータイ言語・文字

韓国では一切漢字を使わない。ケータイには漢字変換機能が内蔵されていないので日本式の同音漢字変換の悩みなどはない。若者にとって新造語や絵文字を作ってやりとりすることがトレンディーである。

(4) ヒューマニティーを洗練させる媒体として

若者のケータイ文化を一方的に裁断するよりは、より成熟したモバイルの環境を経験するよう導くことが既成世代の課題として残っている、と結論付けた。

次に本学佐藤教授の「ケータイ時代の日本語の言語文字文化」と題する報告があった。氏はまず「現代日本語の独特な文字表記体系」として、日本文字は漢字・ひらがな・カタカナという３つの異なる文字体系を融和させて用いる言語であり、日本語で書かれる文章は内容語を漢字で、機能語をひらがなで表記するが、これは漢字を視覚的に目立たせる効果がある、と紹介した。そして、ケータイは漢字の原点回帰をもたらし、少ない字数で意味が通じる漢字ならではの表意性がコミュニケーションの道具として活躍の場を広げていると指摘した。

次に氏は「漢字の“日本文字化”と日本語文字表記の歴史」として、万葉仮名、草仮名、平仮名、片仮名の誕生・用途・社会的地位等について説明を加え、最後に、次のように述べた。

大学生を対象としたアンケート調査では、携帯電話の使用機能としては通話よりもメールが主となっている。メールの内容は①その場のできごとや気持ちの伝達②事務連絡③特に用件のないおしゃべり、となっていて、携帯の「役に立つ」機動性よりも「臨場感」の伝達という機能性が上位であるとの紹介があった。さらに、人々がまるで話すように楽々と文章を書くこの変化は、日本人の文字生活史において画期的なことだと指摘した。また、若者は視覚重視のヴィジュアル・コミュニケーションを繰り広げているが、この若者のケータイメールに現れるさまざまな変化を一過性のものとして研究の対象から退けるべきではない。それは日本語とはどのような言語であるかを改めて問い直す材料であり、未来のコミュニケーションのあり方を考える上でも興味深い対象であると結論付けた。

つぎに北九州市立大学国際教育交流センター印道教授の司会でパネル討議に入った。印道氏はここでのテーマをケータイ文字文化の可能性についてということで議論を進めたいとして、本学外国語学部英米学科山崎教授から問題提議があった。

山崎氏から、英語圏ではケータイメールは少なく、ケータイでは通話が中心だが、日・中・韓の現状について、さらに日・中・韓のケータイの文字言語文化の可能性について質問があった。

これに対して、三氏ともケータイによる通話よりメールが主流であると回答し、２点目の質問についてつぎのように述べた。

陳氏：ケータイメールには字数制限があるため、簡潔・簡略化されたメールが多い。レトリックについては用途によって異なる。恋愛中のカップルであれば簡潔な中にも詩的な文字が並ぶであろうし、事務連絡文であれば、たとえば「昨帰連深謝」（昨日

大連に帰りました。たいへんお世話になりましてありがとうございました）となる。このような簡潔なメールはさらに将来につながるであろう。さらに将来は文法ルールを無視（たとえば副詞が名詞を修飾）するメールが多くなる可能性は否定できない。

李氏：韓国では10年ほど前までチャットが流行し、現在のケータイメールに移行したと思われる。字数制限のためどうしても簡略化されたメールや記号が多用される。ことばは経済的なものを求めるものであり、生き物である。ハングルは15世紀末に考案されたが、現在ではその字体が異なるように、既存のものは将来的に変化・変遷していく可能性があり、その変遷の楽しみもある。

佐藤氏：若者は文字遊びをしながらコミュニケーションを図る。これは若者の文化である。漢字からひらがなやカタカナが誕生した歴史があるように、日本には創意工夫して新しいスタイルを確立していくという伝統がある。したがって、将来の日本語表現に影響を与えていくであろう。

文化ツーリズムの視点から見たアジア都市の祝祭イベントに関する調査研究

谷村　秀彦（前大学院社会システム研究科教授、現在は国際東アジア研究センター所長）

国際観光は初期の観光地周遊型から体験訴求型のツーリズムに変化しつつある。この中で注目されるのが伝統的祝祭ばかりでなく、演劇祭や音楽祭などの文化イベントによる都市観光の交流であり、バーミンガム演劇祭、釜山の国際映画祭などはよく知られている。

本研究は、アジア都市におけるこのようなイベント企画行事に注目し、国際文化ツーリズムの観光デスティネーションとしての可能性を探ることを目指す。また、北九州市の演劇祭や祇園祭などをツーリズムの視点から一層活かす方途を考える。

なお、本研究は2008年度北九州市学術・研究振興事業調査研究助成金を受けて行われた。

第１回研究会

第１回祝祭ツーリズム研究会を2008年９月２日に、上海同済大学の蔡敦達教授を招き、中国と日本のまつりを比較してアジアにおける祝祭の概念的な検討を行った。ここでは韓国出身の本学教授金鳳珍教授が韓国の視点からコメントし、次に本学文学部の竹川大介教授が人類学の立場から、また本学で祝祭研究をテーマとする学位を取得した鬼頭孝子氏が欧米の祝祭との比較という視点から意見を述べ、アジアにおける祝祭の現況を討論した。

中国と日本の祝祭を比較すると、その多くがいわゆる年中行事に由来していることが指摘できる。日本の都市では、祇園祭や博多山笠などのように町全体でお祭りをするところが多くあるが中国ではそのような例は少ない。春節などの年中行事は基本的には家庭内の祝祭である。一方で、国家的な行事であるメーデーや革命記念日などは都市単位で盛大に行われる。都市が独自にまち全体でお祭りイベントを行うためには、一定の社会的条件が必要なのではないだろうか。

第２回研究会

第２回祝祭ツーリズム研究会は、2008年12月12日に開催された。近年、よさこい系祝祭ツーリズムの研究で著名な奈良県立大学遠藤英樹教授をお呼びし、「日本のツーリズムと祝祭の再創造」と題する講演を依頼した。

遠藤教授はスライドを用いて、札幌よさこいソーラン祭りなどの事例を引いて、京都における祇園祭や福岡の博多山笠などの伝統的な祝祭を持たない地方都市において「よさこい系」と呼ばれる手作りの祝祭が盛んになってきている。このような祝祭は、伝統的な宗教的起源をもつ祝祭と違い、公募型で自由参加によるイベントを中心として大変盛り上がっていて、各地に飛び火している。これは新しい参加型祝祭として注目されると指摘した。

次に、本学文学部須藤廣教授が「タイ・ベトナム・中国の少数民族のツーリズムと祝祭の再創造」について講演した。少数民族の独特のめずらしい風習や祝祭は、観光のアトラクションとして注目され、国際的な観光のスポットとなってきている。これは地域社会の構成員全員が参加してきた祝祭から、見るものと見られるものとが区別される祝祭へという大きな変化である。これに伴い、近年では見せるため

のショーとしての祝祭が用意されるようになって来ている。観光客によって地域社会の伝統が失われるという否定的な面がある反面、そのことによって集落の収入源が確保され、教育や医療が進歩するという側面もある。

大連春節調査

以上の２回にわたる研究会の検討を通して明らかになったのは、我が国で一般に持たれている祝祭のイメージが例えば京都の祇園祭や徳島の阿波踊りのような都市ぐるみの組織化されたエンターテイメントであり、祝祭ツーリズムというとこのような祝祭イベントを思い浮かべるけれども、このイメージは中国や韓国では一般的には共有されていないという事実である。では、どのような祝祭が日本・中国・韓国に共有されているだろうかと考えると、漢字文化圏において広く共有されている伝統的行事に思い至る。すなわち、新年や中秋の名月などといった基盤的な民俗習慣に由来する祝祭である。こうした祝祭でも中国・韓国では旧暦によって祝うのが普通であるのに対し、日本では新暦で祝うのが通常であるなどの違いはあるが、新しい年を迎えて心を新たにするという心情は共有しているように思われる。

そこで中国の春節を体験して、祝祭の原点であるアイデンティティの共有を確認することができるかどうか春節の大連を訪問する「アクション・リサーチ」を企画した。すなわち、大連中日文化交流協会に依頼し、本学アジア文化社会研究センターから４名が大連を訪問し、ツーリストして中国の春節を体験することとした。

2009年１月24日に福岡空港から大連空港に飛び、旧の大晦日である25日、旧の正月である26日、旧の正月２日である27日の３日にわたって大連の春節を経験した。

この旅行のハイライトは、１）大晦日の民宅訪問とそこでの家庭における大晦日の家族行事の体験、２）農村訪問による初詣などの行事の様子と農村ツーリズムの体験、３）専門家からの春節行事に関する解題の３点である。大晦日の民宅訪問では、中国の家族が春節にそれぞれの実家に帰り、家族そろって魚料理を食べ、飾り付けをして手作りの餃子パティーをし、お年玉をもらう情景を体験することができた。そこには大晦日の家族そろって年越しそばを食べる日本の風習との多くの共通点があり、文化の原点において共有するものがあることを確認することができた。また、農村見学においては、仏教寺院を訪問し、初詣の習慣がまだ残っていること、先祖祭りなどの行事が農村においては継承されていることを見ることができた。ここでも中国・日本に共通する文化があることを改めて感じさせられた。そして、民俗解題の説明を聞くことによってこうした体験が歴史的事実に裏付けられることを知った。特に、家庭を訪問して食事をともにすることが交流を深めることも感じさせられた。

以上の２回の研究会と大連春節のアクション・リサーチが、この調査研究の主要な内容であるが、このほかに東アジアにおいて日本以外でただ一つ、ポストモダンな状況にあると思われる香港において鬼頭孝子氏が体験的調査を実施し、別稿として報告書をまとめた。また、環黄海圏10都市のウェブサイトからの調査により、これらの都市の祝祭イベントのリストを作成した。

今後の活動予定

１．北九州市調査研究助成金申請（１件100万）に２案応募
- ・アジアにおける人の国際移動―21世紀における新たな共生社会への課題を探る―
- ・北部九州山口地域における国際・国内、陸海空総合物流システム（Extended Logistics Gateway）形成の調査研究－総合物流システムの形成戦略と比較優位性の検証－

２．アジア文化社会研究センター主催国際シンポジウムの実施
「東アジア諸国におけるESD（持続可能な開発のための教育）活動の現状の比較と今後の展望」―マレーシアと韓国の研究者も参加する国際シンポジウムを2009年12月頃に実施予定

３．研究ネットワークづくり
国際東アジア研究センターなどの北九州市関連のアジア研究組織との交流を企画

アジア関係図書コーナーのお知らせ

2009年秋に本学図書館１Ｆカウンター後方に「アジア関係図書コーナー」が設置され、4000冊の図書が配架される予定です。これは、以前から図書館１Ｆ奥にあった「アジア関係図書コーナー」を拡大したものですが、カウンター後方に移動することで、よりわかりやすく、親しみやすいコーナーとなります。

ここには、図書館が所蔵するアジア関連図書だけでなく、2009年３月に退職された吉原久仁夫先生が寄贈された1000冊余りの貴重な図書も配架予定です。吉原先生は東南アジア経済研究で著名な方で、長く京都大学東南アジア研究センターで教鞭を取られ、2002年から本学の国際環境工学部に教授として赴任されました。

ぜひ「アジア関係図書コーナー」に足を運んでください。

センター専任教員紹介―所属・専攻・主要業績

横山　宏章　センター長（大学院社会システム研究科教授）専攻：中国政治外交史

単著『中国の異民族支配』集英社　2009年

単著『陳独秀の時代』慶應義塾大学出版会　2009年

板谷　俊生（外国語学部教授）専攻：中国映画演劇研究

論文「歌舞伎と京劇の交流―1955年・56年の交流を中心に」『国際論集』第３号、2005年

論文「北九州と中国人留学生夏衍について―明治専門学校創立から中国人留学生夏衍入学の頃までを中心に」『北九州市立大学外国語学部紀要』第112号、2005年

金　鳳珍（外国語学部教授）専攻：東アジア関係史、東アジア地域研究

単著『東アジア「開明」知識人の思惟空間―鄭観応・福沢諭吉・兪吉濬の比較研究』九州大学出版会、2004年

共著『世界化의 歴史와 覇権競争』서울大学校出版部、2005年

前田　淳（経済学部教授）専攻：国際金融

論文「ユーロの不安定性とEUの国際資金フロー」『商経論集』第41巻１・２・３合併号、2006年

論文「変動相場制と国際金融構造」信用理論研究学会編『金融グローバリゼーションの理論』大月書店、2006年

竹川　大介（文学部教授）専攻：生態人類学、オセアニア地域研究

論文「禁忌と資源―人はいかに自然を説明するか」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』明石書店、2008年

論文「外在化された記憶表象としての原始貨幣―貨幣にとって美とはなにか」春日直樹編『貨幣と資源』弘文堂、2007年

三宅　博之（法学部教授）専攻：地理学、環境政策

単著『開発途上国の都市環境―バングラデシュ・ダカ―持続可能な社会の希求』明石書店、2008年

論文「バングラデシュ・チッタゴンにおけるリサイクル事業の諸相」小島道一編『アジアのリサイクル』アジア経済研究所、2008年

吉塚　和治（国際環境工学部教授）専攻：分離工学、分離分析化学

単著『分子認識と超分子』三共出版、2007年

論文「海水からのレアメタル回収技術の開発動向」『化学工学』71(6), 2007年

伊野　憲治（基盤教育センター教授）専攻：ミャンマー地域研究、社会史

論文「ミャンマーの混迷―政治対立の構造と今後の展望」『季刊 民族学』123号、2008年

論文「新憲法とミャンマー政治のゆくえ」『アジ研 ワールド・トレンド』第155号、2008年

井原　健雄（大学院社会システム研究科教授）専攻：地域科学
　単著『地域の経済分析』中央経済社、1996年
　論文「本四架橋の整備と瀬戸内海の変貌：今後の課題と展望」『四国運輸研究』第26号、2008年
田村　慶子（大学院社会システム研究科教授）専攻：国際関係学
　編著『シンガポールを知るための62章』明石書店、2008年
　編著『現代アジア研究叢書第３巻―越境』慶應義塾大学出版会、2008年
王　効平（マネジメント研究科教授）専攻：国際経営、比較経営
　単著『華人系資本の企業経営』日本経済評論社、2001年
　編著『新世紀的東亜経済合作』（原文中国語）中国評論学術出版社（香港）、2007年
王　占華（アジア文化社会研究センター教授）専攻：中国語学・言語学
　共著『中国語学概論』駿河台出版社、2006年
　論文「連体修飾語における“了”の性格について」『現代中国語研究』2008年
渡辺　信康（アジア文化社会研究センター担当事務職員）専攻：地域経済学
　論文「港湾物流からみた北九州港の特性分析」『社会システム研究』第５号、2007年
　論文「福岡・北九州・下関の交通インフラ」『東アジアへの視点12月号、第16巻４号』、2005年

編集後記

　アジア文化社会研究センターのニューズレター第１号をようやく発行することで出来て、ホッとしております。このニューズレターが、センターの情報発信の役割だけでなく、多くのアジア研究者をつなぐネットワークとなれれば、幸いです。（田村　慶子）

『アジア文化社会研究センターニューズレター』No.1　2009年８月１日　発行
編集人：田村 慶子
事務局：〒802-8577　福岡県北九州市小倉南区北方4-2-1
北九州市立大学アジア文化社会研究センター
ＴＥＬ：093-964-4080　E-mail：asisen@kitakyu-u.ac.jp
ＵＲＬ：http://www.kitakyu-u.ac.jp/asian/index.html

印刷：よしみ工産株式会社
住所：〒804-0094　北九州市戸畑区天神１丁目13番５号